

同窓会

ニュース・レター

第17号

大阪大学
文学部
文学研究科
同窓会

2018年3月20日発行



小林一三記念館・雅俗山荘前（2017年5月14日、第8回大阪大学文学部・文学研究科同窓会講座）

目次

同窓会会長 あいさつ.....	P2
次期文学研究科長 あいさつ.....	P2
【特集】	
第8回同窓会講座 関係者インタビュー.....	P2～3
同窓生からのメッセージ.....	P4
「教育ゆめ基金」のご報告.....	P5
研究室単位同窓会.....	P5
（英米文学・英語学、人文地理学）	
退職される先生方からのメッセージ.....	P6～7
事務局便り.....	P7
同窓会寄付者のご報告と会長の謝辞.....	P8
第9回同窓会講座のご案内.....	P8
記念講演会のお知らせ.....	P8
2018年同窓会総会のお知らせ.....	P8



逸翁美術館（大阪府池田市栄本町12-27）

〒560-8532 豊中市待兼山町1-5 大阪大学文学部・文学研究科同窓会

URL

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/dousou/>

E-mail

dousoukai@let.osaka-u.ac.jp

会長退任にあたって思うこと

志水 紀代子

激動の二〇一七年（平成二九年）が暮れて、二〇一八年（平成三〇年）が穏やかに明けました。

去年喜寿を迎えた一九四〇年（昭和十五年）生まれの「六〇年安保世代」は、「光陰矢の如し」を日々実感しつつ万感の思いをもって越し方を振り返ります。

不肖わたくしご縁があつて同窓会に幹事として関わらせていただくことになり、副会長時代を入れて一〇年近く役員に就かせていただいて参りましたが、この度一身上の都合で、因らざるも任期を一年残して退任することになりました。幸いにも柏木隆雄副会長が後を引き継いで、今年が五年に一度の総会開催の年になります。その重責を引き受けて下さることになりました。唯々感謝の念に堪えません。心よりお礼を申し上げます。

振り返ってみると、河上誓作前会長が大学改革の風のなかで学部長を経験され、同窓会の活性化の必要性を痛感されて、自らが定年退官された後、石原実前々会長の跡を受け継いで会長に就かれてからは、意欲的に新しい企画を提言し、実践して来られました。事務局スタッフに若い現役の先生方が幹事として入られて、同窓生との距離が近くなり、毎年開催される同窓会講座では、阪大の文学部・文学研究科ならではの企画で、フィールドワークに他学部出身の同窓生も参加されるなどのうれしいハプニングもありました。

柏木次期会長も学部長経験者、こうした文学部独自の同窓会の体制をよく理解しておられます。また大西愛副会長は、大学出版会で長年キャリアを積んでこられて文学部内外に幅広い人脈をお持ちです。今回新たに就任された玉井暉副会長とともに、必ずや次の世代に貴重な文学部同窓会の伝統をバトンタッチして頂けるものと思えます。今後の文学部・文学研究科同窓会の発展を祈念しつつ、簡単ではございますが、ご挨拶に替えさせていただきます。



略歴
1940年生まれ。追手門学院大学名誉教授。哲学哲学史卒。著書「家族の倫理学」（丸善）共訳「ハンナ・アーレントとフェミニズム」（未來社）監修「シンポジウム記録「慰安婦」問題の真の解決に向けて」（白澤社）ほか。

人文学とイノベーション

福永 伸哉

「世の中には変わって良くなるものさそうでないものがあると思います。僕はこの島には変わらないでいて欲しい・・・変わらないうことが魅力になる日がいつかきつと来るような気がします。自然豊かな過疎の離島で、たった一人の医者として奮闘する若者と島民のふれあいを描いたTV版「Dr.コトー診療所」。コトー先生役の吉岡秀隆さんの名演技もあって、いまでも涙なしでは見られません。この台詞は、島にゴミ処理場の誘致計画が持ち上がった際の、先生のつぶやきです。

ご存じのように、いま国立大学の人文系分野の存在をめぐって多くの議論があり、時には極端な「人文系不要論」も耳にします。そんな時、私はこのシーンを思い出します。

大阪大学は二〇三二年の創立百周年へ向けて、世界屈指のイノベーター大学となる目標を掲げ、全学一丸となつて歩みを始めています。

私の専門の考古学から見ると、金属器の発明のような大変革もあれば、農耕牧畜を受け入れないことで一万年以上もの持続可能社会を実現した縄文文化の場合は、変えないことがイノベータータイプだったといえます。変えるイノベーションと変えないイノベーション。両者の絶妙なバランスを提示することは、人間そのものを見つめる人文学の大きな役割です。ただ、それを実社会のなかで多くの人に理解していただく努力が、私たちはこれまでで不十分だったかもしれません。人文学を学び果立られた同窓生の皆さまは、私たちがのっとも身近な理解者であり、同時にのっとも厳しい叱咤激励者でもあります。日頃から「教育ゆめ基金」などを通じて多くのご芳志を賜っていることに感謝するとともに、今後、皆さまとのつながりをいっそう太くして、社会の期待に人文学らしく応えられるよう取り組んでいきたいと考えています。



略歴
1959年生まれ。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程中退。博士（文学）。大阪大学埋蔵文化財調査室助手、文学研究科助教を経て、2005年から同教授。日本考古学会会員。専門は考古学で、弥生・古墳時代の研究が中心。大阪府百舌鳥・古市古墳群の世界遺産登録の活動にもから大和政権へ、「三角縁神獣鏡の研究」、「古墳時代の考古学」（全10巻、責任編集）など。

特集 第8回同窓会講座 「阪急文化に親しむ 創業者小林三三の世界」

伊井春樹先生・正木喜勝氏インタビュー

二〇一七年一月二日（火） 於：逸翁美術館応接室

去る二〇一七年五月四日、第八回同窓会講座として、正木喜勝学芸員（演劇学卒）の解説により、逸翁美術館・小林三三記念館の展示ツアーと、伊井春樹館長（本学名誉教授）のご講義をうかがいました（参加者二三名）。ご好評いただきましたので、文学部・文学研究科とゆかりの深いお二人の職場をご紹介します。インタヴューを実施しました。（インタヴューアは、中尾薫同窓会企画担当幹事）



中尾 先日は同窓会講座にご協力いただき、ありがとうございます。ご講義では、ご専門の『源氏物語』ではなく、小林三三のお話をいただきました。

伊井 小林三三について、阪急文化財団に所属する者として、積極的に情報発信をしていかなければと思っています。

中尾 逸翁美術館、小林三三記念館、池田文庫がありますね。

伊井 逸翁美術館は、小林三三が生涯をかけて集めた美術品など五千点ばかりのコレクションを中心に展示しています。お茶道具が主ですが、絵巻類、屏風、古写本、それに蕪村、芭蕉など様々あります。新しい美術館が出来たとき、前の美術館を小林三三記念館にしました。小林三三記念館は六〇年前、一三が亡くなった後に、その住居を美術館にしたのが始まりです。生前から一三は池田文化会館構想というのを持っており、地元の教育や文化の拠点にしたいという思いがありました。

中尾 この応接室に掲げられている絵は、昭和二十八年の池田美術館構想図です。しかしそれが実現する前に亡くなってしまい、結局小林三三の住まいであった雅俗山荘を美術館にすることにしました。そして美術品の保存・公開によりふさわしい環境として、八年前に新しい美術館を建てました。これが現在の逸翁美術館です。

伊井 池田文庫は、もとは宝塚文芸図書館と称し、宝塚新温泉に来た人に、本を読んでゆつくりしてほしいという目的でした。蔵書も増え、戦後になって今の場所に移りました。小林三三は、市や町に小さくてもよいから図書館や美術館を作るべき

だという、文化的意向をととも強く持っていました。
中尾 ご講義でも、阪急電車をここに引くために行った事業が、当時としてはとても珍しい発想でしたが、現在では当たり前のことになっているというお話がありましたね。

伊井 大阪の証券会社の支配人にならないかと誘われ、家財を売り払って家族で東京から大阪へ訪れたところ、日露戦争後の不景気で証券会社が設立できなくなり、無職になった。それは気の毒だと、当時三井物産が出資していた舞鶴と大阪を結ぶ「阪鶴鉄道」に雇われることになった。同じ頃に、箕面有馬電気鉄道の計画が発足し、発起人に追加されました。ところが、路線予定地の大半は山林や畑で人口も少なく、電車を引く意味もないと他の発起人達が手を引くところ、小林一三は敷設後の計画を立て、一手に引き受けることになったのです。

基本的に電車は、都市と都市とを結ぶ手段として発展し、阪神電車は人口も多い神戸の海岸沿いを走っていた。空白地が、この山の手の、阪急電車がのちに引かれる場所だった。箕面公園と有馬温泉を目ざす電車にすぎなく、あとは何も無い。小林一三は、日記にも書いていますが、池田にあった阪鶴鉄道の事務所から、予定敷地を梅田まで二回歩いてみたそうです。
中尾 二回も！

伊井 二回歩いてみて、住宅をつくらせて人に乗せれば良いじゃないかと。これが田園都市構想の最初ですよ。つまり地域の住民を都市に通勤させると。明治から大正の大阪は工場都市で、煤煙がすごかった。そうした煤煙の町に住むより、二、三〇分離れるだけで静かな住宅地がある。そこから大阪に通えばいいと発想するわけです。ハナから発想があったわけではなく、やむにやまれず、そういう考えに行き着いた。と言っても沿線に住宅を作り、通勤する住民を増やすなんて一年や二年では出来ません。そこで平行して終点に遊覧施設をつくらうと。一番遠いところに、子どもが喜びそうな施設をつくられば、大人

元教員・卒業生が活躍する 美術館に行ってみませんか？

◆阪急文化財団 逸翁美術館 展示情報

逸翁美術館 開館60周年記念展

One more

「未来につなぐ 和の意匠力」

2018年3月24日(土)～5月6日(日)

縄文・弥生、はるか昔に作られた物の姿や図柄に、現在の私たちも新鮮な印象を覚えます。それぞれの時代の日本人が生み出した文様や意匠は、歴史の中で繰り返し用いられ、様々な美術工芸品の上に形を変えて親しまれてきました。60周年最後を飾る本展では「平明」「遊楽」「静寂」の三つのテーマで作品を選び、未来につなぐ和の意匠(デザイン)力を示してみたいと思います。

も一緒に電車に乗って訪れるはず。宝塚は当時まだ終点ではなく、有馬温泉への途中駅ですよ。まずは箕面に来てもらおうと、箕面に動物園をつくり、駅前広場には公会堂を設け、運動場も整備し、テニス大会を開催するなどしてあります。動物園や公会堂では演劇も行っていますが、箕面はそれ以上の拡大ができない。二年後に有馬までの延伸をあきらめ、宝塚を終点とし、箕面の施設を移すことになりました。

中尾 無料だったんですね。
伊井 無料といっても、宝塚までの交通費がかかるし、勿論入浴料は必要です。売店ではお土産を買い、食堂で食事もある。「ただで見られる宝塚少女歌劇」と宣伝していても、結構使われるではないかと、批判の記事も出ています。まあ、これは現在も同じですよ。一日遊ばせるといいます。

箕面で行っていた演劇は、巖谷小波の大阪お伽倶楽部に任せていたのだと思います。駅前に大阪お伽倶楽部の事務所があり、久松一声や高尾楓蔭がいました。この人達を宝塚唱歌隊に招くわけです。高木和夫といった有名な音楽家も呼ばれました。
中尾 すぐに決断して、次にむけて行動する力が素晴らしいですね。

伊井 本来は長期計画ではなかったのではないかと思います。たとえば、運動場も箕面ではテニスコートくらいしかできないため、豊中に豊中グラウンドをつくりました。第一回全国中学校優勝野球大会を開催し、それが甲子園における、現在の全国高等学校野球選手権大会へとつながりました。
中尾 こちらは、そういった小林一三の活動に関する資料が豊富にあるかと思いますが、最近データベースが整ってきましたね。

正木 「阪急文化アーカイブズ」ですね。二〇一七年四月から公開しています。池田文庫が所蔵する阪急や宝塚歌劇の歴史ポスターをインターネットで見ることが出来ます。ポスターは今でも駅に貼られていたり、車内に吊るされていますよね。あれです。

阪急は開業以来、鉄道・住宅・デパート・ホテル・演劇・スポーツ・レジャーなど、さまざまな事業を展開しています。また沿線では寺社の年中行事などさまざまなイベントが行われています。それらを告知する百年分のポスターをスマホでもご覧いただけるようになりました。沿線に育まれた文化や、現代につながる沿線の魅力を再発見していただけたらと思います。阪大に通われた方にとっても懐かしいものが多いと思いますよ。

それから、芝居の浮世絵も三万点ほど公開しています。ポス

ターと合わせてインターネットで公開しているのはまだ五万件ですが、今後調査が終わったものから順次追加していきたいと思っています。眺めているだけでも楽しいですし、もっと研究にも活用してほしいですね。

中尾 最後に、同窓生、同窓会になにかお言葉をいただけませんか。
正木 まず、まだ同窓会に入会してなくてすみませんと(笑)。
伊井 入ってないの!?

正木 いい意味で、思い入れがないのかもしれないですね。同窓会というのは、ある先生がおっしゃっていました。子育てが終わったり、リタイアしたり、自分の時間ができたときに、ふと懐かしくなるような存在でいいんだよ、と。それも一理あるなと思います。だから将来の楽しみにしておきたいと思っています。同窓会ではなく、同級生・同窓生ということであれば、仕事の関係で同じ阪大文学部出身の方に出会うと、根拠のない頼もしさとか、親しみを覚えますね。同窓会にはまだ入っていませんが、ゆるやかながら精神的な結びつきはあると思っています。

中尾 伊井先生はいかがですか？
伊井 大阪大学は、情報発信を世界に対して積極的にしていますよね。これからは文学研究科も研究成果をもっと発信していただければ、我々外部からも支援できると思います。今は社会のニーズもありますから、個人個人が、もっと情報発信をしてほしいものです。

中尾 今日は貴重なお話とお時間をいただきまして、ありがとうございました。
伊井・正木 ありがとうございます。

プロフィール



伊井春樹先生
1941年愛媛県生まれ。文学博士。愛媛大学教育学部、国文学研究資料館を経て、1984年より大阪大学文学部助教授・教授として、国文学、特に中古文学の後進の育成にあたる。2004年、名誉教授。国士舘大学文学部教授、国文学研究資料館館長などを歴任し、現在は阪急文化財団理事・各館長。「源氏物語」研究の第一人者。近年は小林一三の研究に精力的に取り組む、「小林一三は宝塚少女歌劇にどのような夢を託したのか」等を著す。



正木喜勝学芸員
1978年京都府生まれ。博士(文学)。2000年大阪大学文学部演劇学専修卒業。大阪大学大学院文学研究科助教を経て、2013年より阪急文化財団学芸員。専門は近代日本演劇史。共著に『劇的尖端 村山知義』『昭和戦前期プロレタリア文化運動資料集』など。また草創期阪急の文化事業研究にも取り組み、「草創期宝塚少女歌劇上演目録補遺」「豊中グラウンドの誕生とその意義」などの論文もある。

同窓生からのメッセージ

本会では、文学部・文学研究科の就職支援活動に協力する一環として、二〇二三年度より、就活サポート講座を共催しております。二〇一七年度は、一〇月二六日に開催されましたが、その折にお話いただいたお二人から、ご寄稿いただきました。

光陰矢のごとし！ 嬉しい再会

柴田 三穂子

卒業以来顔を合わせることも無かったゼミ仲間と、数年前ひょんなことで連絡を取り合い、年に一度のペーパースで集まれるようになりました。今はロンドン、上海、東京、大阪と住む場所がばらばら。日程を合わせるが大変ですが、そのぶん会えた時の喜びはひとしおです。会うたびに「全然変わってない」と互いに言い合うのですが、傍から見たら立派なおっちゃん、おばちゃん。早いもので、二〜三〇代はあつという間に通り過ぎ、不惑の四〇代を感いまりながら過ごし、気が付くと会社人生も終盤に！



(左手前) 長部 (右奥から) 新田、箱嶋、柴田

振り返ると、会社では主にラジオスポーツや編成、宣伝などを長く経験し、現在は放送後の番組を様々な形でマネタイズしていく二次利用の仕事に携わっています。具体的に言うと、国内外への番組販売や配信、アニメやドラマ、映画への出資などです。

放送局というと、制作や報道といったイメージがあるかと思いますが、私自身はもともとクリエイティブな方ではないと思います、何らかの形で番組を支える部署を希望していたので、おおむね希望通りに放送局の仕事を様々な側面から見ることができました。

唯一叶っていないのは、入社時に希望していた文化事業部で



(左から) 辻先生、新田、出来

柴田三穂子 (しばた みほこ)
1986年4月 文学部入学
1990年3月 同 美学科卒業 (西洋美術史専攻)
1990年4月 毎日放送入社
現在 同社コンテンツビジネス局コンテンツ業務部

地方行政に携わって

鈴江 惇一

西洋美術史を専攻していたことで美術展の仕事が出来たらと思っていたのですが、今のところかすりもしていません。年とともに自分の希望も移り変わりますし、好きなことは仕事にしない方が良いというお達しでしょうか。ということ、美術展に関わることはできていませんが、その美術の楽しさを教えてくださったのは、ゼミでお世話になった木村重信先生と辻成史先生です。残念なことには昨年一月に木村先生の訃報に接しました。先生の豪快な笑い声がいまだに思い出されます。辻先生とは一昨年東京で集まる予定が、当日首都圏の交通がマヒするくらいの大雪に見舞われ断念。ようやく昨年、東京組が再会を果たせ、今もダンディな辻先生を私も写真で拝見することが出来ました。今ならまじめな学生になって、休講を喜ばずどの講義もちゃんと受けるのに(おそろしく)、学生時代を懐かしむこのごろです。

平成二三年四月に兵庫県川西市役所に入庁してから現在七年目。最初に驚いたのは、市役所という箱のなかで、非常に多くの人々が様々な事業に従事していることでした。住民票ぐらいでしか皆さんあまり行かれたことがないかもしれませんが、税金や保険はもちろん、観光、政策立案、地域連携、防災、子育て、教育、道路、保健、水道、消防、病院、選挙、市議会・・・ここでは書ききれないほど様々な事業があり、市役所職員は今あげたものすべてにかかわる可能性があります。

就職活動時、民間が公務員か迷い、同時並行で進めようとしたのですが、ESやSPIの時期と、集中して勉強したい時期が重なり、考えた末に公務員を選びました。国家まで受けられるように勉強するなかで、結局地方自治体、そして市役所を受けることに最終的に決めたのは、どんなことにやりがいを感じるか考えたからです。ミク

ロカマクロか、考える単位によって行政ができることは変わります。私は、市民の生活の根幹に直接携わることと働いている実感が得られそうだと思いい市役所を受験、入庁しました。

最初に配属された部署では保育所の人退所補助金や、学童保育全般に三年ほど携わりました。三年経験した後、次に異動した文化・観光・スポーツ課では、多くの人で賑わう猪名川花火大会をはじめ、一庫ダム周遊マラソン大会など各イベント、国内外でつながる市町との交流、文化施設指定管理運営に係る事務など、まったく前の部署と違う仕事に戸惑いつつ、走り続けました。児童福祉の時と違うのは、ありがたうと感謝されたり、花火を楽しそうにみている観客をみたりすると、実感をしやすいのです。業務量は多いですが、なかなかできない経験だと思いつながら職務にあたっています。

平成二九年、文化・観光・交流の仕事をして三年少し経った頃、官民連携ということで市内企業である電鉄会社の方へ人事交流として半年間派遣されました。いきなり営業部署で働くこととなり、知らないこと、カルチャーショックの連続で、半年間という短い期間でしたがとても有意義で、非常に濃い経験をしました。ハイキング、イベント列車、アートイベント、インバウンド検討など、めまぐるしくも貴重な時間でした。

現在は元の職場に戻り、文化・観光・交流事業に再び従事しています。共通して大事だと実感したのは、重要なのは人間関係だということです。仕事をきちんとこなす能力はもちろん、人とのコミュニケーションや、相手の気持ちを慮ることを大切に、皆さまこれから頑張っていたいただきたいなと思います。



鈴江惇一 (すずえ じゅんいち)
平成19年4月 大阪大学文学部人文
学科学科入学
平成20年4月 同 英米文学・英語
学専修へ
平成23年3月 同 卒業 (卒論テーマ:
現代アメリカ英語の変遷について)
平成23年4月 兵庫県川西市役所
入庁。児童保育課へ配属。保育所や
学童保育関連の事業に従事。
平成26年4月 文化・観光・スポーツ
課へ異動。
国内・国際交流事業(都市交流など)、
観光イベント(花火など)、文化事
業(文化施設、各団体、美術展など)
に従事。(平成29年7月〜12月
事交流として民間企業へ派遣)

◆「教育ゆめ基金」のご報告◆

いつでも、お心のままにご寄付いただければ幸いです

文学部創立60周年(平成20年)の折に創設しました「教育ゆめ基金」は、文学部・文学研究科の教育活動を支援していただくための基金です。この基金は、人文学教育の国際化、学生の海外留学支援、留学生の支援、優秀な学生への奨学金等、もっぱら優秀な人材を育成するための教育助成を目的としています。2013年秋に大阪大学「未来基金」と窓口統合したことにより、いっそう多くの同窓生ならびに教職員の皆様より、2017年度総計320万円ほどのご寄付をいただきました。ご厚情に心よりお礼申し上げますとともに、今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。(文学研究科長 金水敏)

2017年1月～2017年12月「教育ゆめ基金」寄付者リスト(敬称略・五十音順)

阿南 美代	岩朝 弘晃	加地 宏江	北村 正博	斎藤 芙美子	高橋 照彦	野田 春美	福田 治子	水野 義道	若山 晴子
天野 一平	植田 喜代子	柏木 加代子	木村 純雄	佐藤 みづほ	竹鼻 圭子	野村 玄	福永 伸哉	南 美保子	
綾 宣雄	上羽 和夫	柏木 隆雄	金水 敏	里見 軍之	田島 駿斗	長谷川 賢二	藤川 隆男	南 佑亮	
荒川 正晴	浦崎 なぎさ	片倉 穰	桑原 恵	真田 信治	柘植 眞志	馬場 忍	布施 典子	宮川 文子	
荒牧 典俊	大石 雅章	神山 孝夫	小嶋 正則	志水 紀代子	筒井 幹夫	瀧吉 繁子	別府 茉依	妻鹿 友弘	
井岡 泰子	大坪 利綱	上山 泰	小谷 晋一郎	白土 芳人	中瀬 富美子	菱田 正	細川 富美恵	森田 靖	
石井 悦子	大野 篤一郎	川那 遥依奈	小西 潤子	鈴木 多恵子	中原 計	平井 真弓	堀上 留未	森本 由紀子	このほか、
石原 実	大村 睦子	岸 彰則	小林 正人	高梨 友宏	成松 総子	平岩 静	待兼 60年談話会	山田 三三夫	氏名掲載を
伊東 信宏	小川 英雄	北泊 謙太郎	小松 洋一	高野 千鶴子	西尾 元伸	平田 雅子	松田 順子	山田 将文	希望されな
猪岡 叶英	尾崎 奈津美	北村 登	小山 眞理子	高橋 正弘	貴名 淳一	深水 香津子	間野 英二	我妻 茂美	い方27名

◆「教育ゆめ基金」の支出(見込)(2017年4月～2018年3月)

- ・海外留学支援制度奨学金540,000円(3名分)・大学院生海外調査等助成380,000円(13名分)
- ・エラスムス・ムンドゥス・プログラム288,000円(2名分)
- ※2017年度末残額(見込):10,703,000円

文学部・文学研究科では、多くの研究室がそれぞれ独自の同窓会活動を行っています。今回は、こうした活動のうち、英米文学・英語学のもの、人文地理学のものをご紹介します。

人文地理学講座からのご挨拶

堤 研二

大阪大学文学部・文学研究科の卒業生・修了生の皆さまにはご健勝にてお過ごしでしょうか。人文地理学講座からご挨拶を申し上げます。同窓会関係のお便りに人文地理学講座から寄稿いたしますのは珍しいことですので、ここでは簡単に人文地理学講座の歴史にふれておきたいと思っております。

大阪大学では1952年に人文地理学の学科目が設置され、非常勤講師による授業が開始されました。1956年2月に人文地理学の部門が設置され、同年5月に堀川侃先生が講師として着任されました。堀川先生が転出後の1962年に矢守一彦先生が着任されました。人文地理学部門は1975年に発足した文学部日本学専攻比較文化学講座へと改組され、同年に高橋正先生が着任されました。この間、1963年には教養部が設置され、海野一隆先生が着任されました。1994年に教養部が廃止され、文学部も改組されて1995年に人文地理学の教室は独立した講座となりましたが、1助教教授ポストが日本学講座で運用される形となってしまいました。高橋先生と金坂清則先生の体制の後、小林健太郎先生・小林茂先生の体制となりましたが、小林健太郎先生ご逝去後、1999年に堤研二が赴任し、小林茂先生のご退職後の2015年に佐藤廉也先生が着任されています。2015年には講座化20周年を記念して人文地理学会の大会を豊中キャンパスで開催されました。翌年に記念行事を開催し、記念誌も刊行しました。2017年には日本地理学会の公認資格「地域調査士」の科目認定校となりました。

毎年2月には口頭試問を終えた後の卒業論文・修士論文の発表会を開催しており(終了後には追い出しコンパを実施)、OB・OGの方々もおいで頂いて有益なアドバイスを頂戴しています。人文地理学講座では座学の講義などのほかに、演習や地域調査実習も行っており、多様な授業を通じて社会との接点を意識した教育を行っています。これからも同窓会の皆さまのご支援を賜りますようお願い申し上げます。



人文地理学講座21周年記念行事(報告会)、2016年10月22日(土)

阪大英文学会—設立50年を迎えて 田中 英理

英米文学・英語学専修では、毎年10月に阪大英文学会を開催しています。阪大英文学会は、「学会」という側面と同時に英米文学・英語学専修の卒業生・修了生の「同窓会」としての役割も果たしています。多くの場合、現役院生、修了生、教員などの研究発表や講演とその後の懇親会からなっています。

2017年は10月28日に阪大英文学会が開催されました。今年は、阪大英文学会設立50年(1967年設立)であり、また、英文学第四代教授・藤井治彦先生がお亡くなりになってから20年という節目の年でもありました。そこで、2017年の阪大英文学会は、藤井先生の思い出を各年代の教え子たちが語る座談会と藤井先生と深いご親交があったGeorge Hughes先生のご講演が会の中心となりました。どの方からも藤井先生の広く深い学識、そして楽しいお人柄を偲ばれる話を伺うことができ、「学者」という言葉はまさにこのような方のためにあるのだろうと改めて感じました。

また、学会のはじめの挨拶には名誉教授の河上誓作先生がお立ちになられ、阪大文学部及び阪大英文学会の歴史を『大阪大学文学部50年の歩み』(1998年発刊)とともに振り返られました。若い世代は、『50年の歩み』を見て、自分たちの先人たちの活躍を知り、誇らしく思ったようです。

懇親会では、河上先生が喜寿をお迎えになられましたので、ささやかながらお祝いいたしました。河上先生は、阪大現役時代と全く同じお姿で、洗刺とされていらっしゃいました。河上ファンの皆様には、ご安心いただければと思います。

阪大英文学会に参加し、恩師や同窓生と語ってまた次の日への活力になったように思います。英米文学・英語学の同窓生の皆様、是非、阪大英文学会にお越しになって皆様のご活躍ぶりをお知らせくださいませ。お待ちしております。

田中英理(たなか えり)

文学研究科文化表現論専攻英語学専修 准教授
1994-1998年 大阪大学文学部
1998-2000年 大阪大学大学院文学研究科文化表現論専攻博士前期課程
2000-2004年 大阪大学大学院文学研究科文化表現論専攻博士後期課程(単位取得退学)
2004-2007年 日本学術振興会特別研究員(PD)
2007年 大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了(博士(文学))
愛媛大学講師、大阪医科大学講師を経て、2015年10月より現職



退職される先生方からのメッセージ

(五十音順)

◆Mくんのこと

奥平 俊六

この学校でたくさんの学生に出会った。一人一人さまざまな思い出があるが、忘れられない一人の学生について書いておきたい。その学生、Mくんは僕の研究室に所属したわけではない。入学時に共通教育の授業の取り方について相談に来たのである。合格後、がんが見つかり、通院治療を行いながら受講するので、どのようにすればよいかとのことであった。

美術史に興味があるというので、研究室に来ていただき、さらにお話をうかがった。僕の問いかけに彼は、ロシアの辺境の美術、スペインの宮廷絵画のことなど、熱心に語り始めたのだが、日本美術にも興味を持っており、その知識量は驚くべきものであった。展覧会にもしばしば足を運んでおり、作品に素直に感応できる目を持っていてもよいかとわかった。僕が美術史のスタッフのことや専門課程で毎週金曜に行う見学演習のことなどを説明すると、本当に楽しみにしている様子であった。

講義が始まり、彼は放射線治療の合間、二週に一度くらい講義を聴講していた。講義の後にはしばしば美術史についてのお話をした。そんなとき、僕の方が突然休講せざるをえなくなった。障害のある次男の容態が急変し、介助で手が離せない状況になったのである。なんとか登校できた日の授業で、事情をお話して、僕の講義は来週から同僚の先生方に代わっていただくことになりました、と伝えた。その講義後、Mくんが教卓までやってきて「何があるかわかりませんね」と僕を慰めてくれたのである。その優しい澄んだ目が忘れられない。

その後Mくんが専門課程に進学することはなかった。僕の方は同僚や地域の助けもあってなんとか復帰することができたのだが、彼はその年のうちに亡くなった。あの聡明な魂は、どこから来て、どうして僕に語りかけ、そしてどこへ行っただろうと今もときおり考える。



略歴
1953年、愛媛県生まれ。東京大学大学院博士課程中退。大阪府立大学専任講師を経て、1991年に着任。著書に『彦根屏風一屏風劇の演出』（平凡社）、『後屋宗達』（新潮社）、『舟木本洛中洛外図一町の音が聞こえる』（小学館）、『屏風をひらくとき』（大阪出版会）など。

◆「化ける」の見る愉しみ、する楽しさ

片山 剛

卒論・修論が必修となっている学部・大学院で教員として勤めることの愉しみは、最終年度の論文作成を通じて、「化ける」（急激に成長する）学生がでてくることをまちかで見ることにある。突破口を、苦闘のすえに自力で見いだす者もいれば、先輩や教員からの示唆をきっかけとする者もいるが、そこから議論を展開させ、二、三か月のあいだに、場合によっては最後の1か月で、読んでワクワクする論文を書き上げる学生が出てくると、二〇代の若者もつ知的爆発力に改めてうならされる。

運動競技ならば、おそらく高校生の時が一番の伸び盛りで、高校野球の監督さんなどは、その愉しみを大いに味わっている。しかし知的「競技」で一番伸びるのは、大学生や大学院生の時である。とはいえ、学生がみな「化ける」とはかぎらない。アドバンスらしいものを提供できず、論文が平板なものになってしまった時には、申し訳ない気分になってしまう。その後の「大器晩成」を願う次第です。

大学教員のもう一つの楽しみは、教員自身が「化ける」ことにある。大学院生の時から、私は近世・近代の中国農村社会史を専攻してきたが、中国大陸における資料提供の制約もあり、大縮尺の地形図や地籍図、空中写真等の（地理空間情報）を入手することが困難であった。そのため、（地理空間情報）を携行して調査を行い、農村社会の具体像を提示することもむずかかった。しかし二〇〇五年以降、研究チームを組んで史料探索を進めるなかで近代的地籍図等を「発掘」し、（地理空間情報）を携えて実地踏査や古老からの聞き取りを行うという、追い求めてきた手法による研究をやっと実現することができた。このうち南京篇については、その成果を二〇一七年の編者で上梓させていただいたが、広東篇は現在とりまとめ中です。乞うご期待。



略歴
1952年生まれ。東京大学人文科学研究科博士課程中退。高知大学人文学部を経て、1989年に大阪大学文学部着任。著書に、『華中・南デルタ農村実地調査報告書』（共著／大阪大学文学部紀要34 1994）、『近代東アジア土地調査事業研究』（編者／大阪大学出版会 2017）、『清代珠江デルタ図甲制の研究』（単著／大阪大学出版会 2018年刊行予定）など。

◆リュックサックとスニーカー

杉原 達

一九九五年一月の阪神淡路大震災は、阪大日本学に着任して三年を終える直前のことだった。自宅が西宮市の南西部にあり、震度七の被災であった。当時、三世代七人家族で暮らしていたが、家は半壊し、電気水道・ガスが復旧したのは四月に入ってからだった。

数多くの学生・教職員が被災した。私にとっては、避難所暮らしと卒業・入学業務が待たなして進み、まず今日を過ごすことが精一杯の日々だった。当初寸断された鉄道には復旧とともに利用者が増えてきた。阪急神戸線、武庫川を境に、大阪側はさびやかで、神戸側はブルーシートが目立った。多くの乗客の姿は、リュックサック、軍手、帽子、スニーカー。駅と家を往復するには、この姿が最もふさわしかった。もちろん私もその一人だった。仕事帰りに同僚や学生さんと石橋駅で挨拶してから、リュックに詰めた洗濯物を石橋温泉のコインランドリーに放り込み、待ち時間に近所の立ち呑み屋で暖を取る、というルーティンを続けたことを忘れはしないし、熱燗へのこだわりを反省することもない。

二〇〇三年突然に、築五〇年の自宅の二階から玄関が崩落した。半壊から二度修理したものの来るべきものが来た、一旦は収めたはずの痕跡が露呈したのだと思った。震災から八年目のことだった。建替えの間「震災後」という言葉の意味をかみしめた。

関東大震災、阪神淡路大震災、東日本大震災をテーマに在日外国人の動向に焦点をあてた授業を行ったのは、ずいぶん後になってからである。毎回様々な痛覚を感じながらの講義となった。

被災後、リュックサックとスニーカーを愛用して今に至っている。風変りな教員と思われようと、それが私のスタイルとなった。そのようなあり方を受け入れて下さった文学研究科・文学部の皆様に感謝を申し上げたい。



略歴：
1953年、京都市生まれ。京都大学経済学部、大阪市立大学修士課程、関西大学博士課程修了。博士（経済学）。関西大学教授を経て、1992年大阪大学文学部助教授。1999年大阪大学大学院教授。日本学／文化交流史。著書に『オリエンタルへの道—ドイツ帝国主義の社会史』、『越境する民—近代大阪の朝鮮人史研究』、『中国人強制連行』、共編著に『岩波講座「アジア・太平洋戦争」』など。

◆夢のなごり

高橋 文治

私は高度成長期に幼少期を過ごした。田んぼだった田舎の土地にバターの箱のような集合住宅がいきなり立ちはじめ、広大な団地が瞬く間に形成されたさまを今でも記憶しているし、そうした団地に数年住んだこともあった。当時、団地はサラリーマンの憧れで、子連れの若い夫婦が大量に流入する、敷地内にショッピング街や幼稚園、小中学校まで建設されて鄙びた農地は郊外の若々しいベッドタウンへと変貌したのだった。だが、人が歳をとるように町も歳をとる。あれから半世紀が過ぎて子供たちの歓声が消えると、あとには煤けた郷愁と過疎が残った。私が幼少期に住んだ団地などは形跡もなく、なにか大掛かりなベトンに遭って巨人の夢にでも巻き込まれた気分だ。

私は、偉くなりたいたいとか有名になりたいと思っただけではないが、その代わり、人の役に立ちたいとか社会に貢献したいと願ったこともない。覇気のない匿名希望のエゴイストである。私のこうした生活信条はおそらく高度成長期のあの幼少期に形成され、平凡なサラリーマンが団地の向こうに人並みの近代的な未来を夢見たように、大衆の英知と人類の発展とを漠然と信じた結果なのだと思う。私は、大阪大学という広大な団地の一棟・文学研究科にある、中国文学研究室という一室に一七年半のあいだ籍を置き、前任の灯りを受け継いで来者を持った。よく働いたつもりはないが、不真面目だったつもりもない。匿名希望どおりの生活だったろう。文明は、それ自体が歳をとる。文学研究科という一棟はそのうち取り壊され、広大な団地もやがては姿を消すだろう。その時、集合住宅の窓々に宿っていたささやかな灯りを一人でも多くの人が記憶し、そこにあった夢の数々を一人でも多くの人が懐かしんでくれることを願うばかりである。



略歴
京都大学大学院博士後期課程退学。追手門学院大学文学部を経て、2000年10月に大阪大学。著書に『モンゴル時代道教文書の研究』、共著に『董解元西廂記諸宮調』研究、『成化本『白兔記』の研究』、『烏臺筆補』の研究、『元典章が語ること—元代表令集の諸相—』など。

◆一〇年間びびる日々

浜渦 辰二

二〇〇八年に阪大に着任して一〇年間、与えられた役割を果すべく駆け抜けた日々でした。それまで、高知、名古屋、静岡、福岡、ドイツ、福岡、静岡に移り住み、関西はいつも素通りばかりで縁がありませんでした。寝耳に水のように声をかけられて、もう骨を埋めるつもりになっていた静岡から、慣れない「ぼけとつこみ」の地に恐る恐るやって来ました。

なにせ、今では「折々のことば」の著者として有名な、当時阪大総長となった方の後任ポストということですが、それを継承するのは荷が重すぎたと思っただけですが、私が前任校でやって来たことを続けてもらえばいいと言われて、それならと、一〇年間あれば何か新しいことができると、という意欲ももちながら、やりたいこと・できることだけをやってきました。

大阪大学教授という肩書もあつてのことでしょうが、一〇年間で、それなりに多数の論文、研究発表、講演をこなし、社会人学生教育に力を入れたとともに、多数の博士論文の主査を務め、社会連携の活動にも取り組んできました。定年退職直前になって、編者および単著の図書三冊を刊行予定で、背負ってきた肩書を最後にそれなりに果すことができそうです。

在職中に何より楽しかったのは、海外出張の機会を多く得られたことです。科研費の海外調査研究により北欧諸国を、また、研究仲間との学術交流により東アジア諸国を訪れることができたのみならず、ドイツ・ハイデルベルク大学との交流協定により三度、ハイデルベルクに滞在できたのは、阪大に来たからこそ可能になったことと感謝しています。

定年退職後は、特に関西地区に留めるものがなければ、静岡の自宅で静かな余生を送るために帰ることになろうかと思えます。そのうち、阪大で過ごした一〇年を「邯鄲の夢」のように懐かしく思うことでしょう。



略歴
1952年高知県生まれ。九州大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学、ドイツ留学ののち、九州大学文学部助手、静岡大学人文学部助教授、同教授を経て、2008年より大阪大学に。著書に『可能性としてのフッサール現象学』、編著書に『北歐ケアの思想的基盤を掘り起こす』、監訳書に『フッサール「同主観性の現象学」』全三巻など。

事務局使い

●お知らせ

◇「文学部・文学研究科 卒業生・修了生名簿」(二〇一七年版)について
二〇一七年三月刊行の『大阪大学文学部・文学研究科卒業生・修了生名簿』ご購入を随時承っております。頒価(五千四百円・送料込)でお送りいたします。ただし名簿のご購入は同窓会会員の方に限定しておりますので、ご入会がお済みでない同窓生の方には入会手続きをお願いしております。あらかじめご了承下さい。なお、新規に同窓会終身会費(一万円)をお支払いいただいた方のうち、ご希望される方に一冊呈呈しております。振込用紙通信欄に名簿希望の旨をお書き添え下さい。
◇ご購入希望の場合は以下の郵便振替口座に所定の金額をお振込み下さい。ご入金確認後、発送させていただきます。ご購入に際しご質問等ございましたら同窓会事務局まで遠慮なくお問い合わせ下さい。

◇同窓会へのご寄付について

同窓会では、寄付金(一口二千元)を受け付けております。昨年度・今年度と、たくさんの方に支援を賜りました。八頁にご寄付をいただいた皆様の御芳名を記載しております。誠にありがとうございました。引き続きご支援をお願い申し上げます。

【名簿購入代金・終身会費のお支払い、ご寄付の受付】

口座番号 009401179043
加入者名 大阪大学文学部同窓会事務局

*お手数ですが、通信欄に①卒業修了年、②専攻専修名をご記入下さい。

●お願い

◇住所変更について

住所変更・勤務先変更等ございましたら、必ず同窓会事務局までご一報下さい。名簿への住所・電話番号等の記載拒否を希望される場合は、その旨あわせてお知らせ下さい。皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。

●大阪大学文学部・文学研究科同窓会

- ◆会長：志水紀代子 (S四〇卒)
- ◆副会長：柏木隆雄 (S四四卒)、大西愛 (S四〇卒)
- ◆事務局メンバー
- ◆事務局長：舟場保之 (S六一卒)
- ◆総務：高木千恵 (H一〇卒)
- ◆会計：西田有利子
- ◆企画：市大樹 (H七卒)、中尾薫 (H一五修)
- ◆広報：舟場保之 (S六一卒)、齋藤理生 (H一〇卒)
- ◆事務局補佐：宮川真弥 (H二二修)

●住所：〒560-0852 豊中市待兼山町一番五号

●ホームページアドレス：http://www.letosaka-u.ac.jp/dousou/

●事務局メールアドレス：dousoukai@letosaka-u.ac.jp

同窓会へのご寄付のお礼

2014年のニューズレター第13号より、同窓会活動のこれからの更なる活動のため、みなさまに一口二千円で呼びかけを始めさせていただきましたところ、下記のみなさまから早速に文学部・文学研究科同窓会にご寄付を頂きまして、誠にありがとうございました。

独立法人化の中で、同窓会活動の重要性が見直されておりますが、学部の独自性を生かして今後どのような支援活動をしていけるのか、多くの大学の学部・研究科で試行錯誤の段階にあります。当文学部・文学研究科は、他学部・研究科に比べても引けを取らない多くの人材が輩出しておりますが、残念ながら財政的な基盤が弱く、まだまだ十分な支援が出来ておりません。これからさらに多くのみなさんにこの実情をご理解いただき、お知恵をお借りして、独自の支援活動をしていく体制を整えていきたいと思っております。

本同窓会といたしましては、一口二千円で今後とも多くの卒業生のみなさまにこの寄付金のことを知っていただき、賛同の輪を広げていきたいと思っております。どうぞ今後ともご支援を頂きたく、よろしく願い申し上げます。

同窓会会長 志水紀代子

同窓会寄付者
御芳名

(2017年1月～2017年12月入金分)
敬称略

神谷かをる

2018年同窓会総会について

5年に一度開催される同窓会総会は、文学部創立70周年記念事業に合わせて、2018年11月23日（金、祝日）に大阪大学会館（豊中キャンパス）において開催することとなりました。詳細につきましては、今後、記念事業委員会の検討を経て、決定されます。多くのみなさまとお会いできることを楽しみにしております。



伊井春樹名誉教授による講演（池田文庫）



正木喜勝芸芸員による解説（小林一三記念館）

第9回大阪大学文学部・文学研究科 同窓会講座のご案内

2018年5月12日（土）13時30分～（13時受付開始）
大阪大学中之島センター9F会議室1・2

「文学と音楽の午後」

第1部講演（和田章男文学研究科教授）、第2部大阪大学交響楽団OB/OGによる弦楽四重奏

●お申し込み方法

氏名・卒業（修了）年次・専攻を明記の上、メール又はハガキで下記連絡先までお申し込みください。

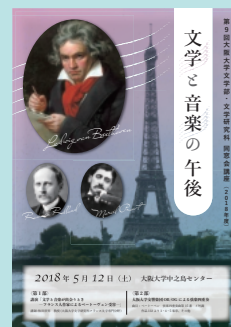
※応募締切は、2018年4月30日（月）です。

※応募多数の場合は先着順とさせていただきます（定員30名）。

メール：dousoukai@let.osaka-u.ac.jp

住所：〒560-8532 大阪府豊中市待兼山町1-5

大阪大学文学部・文学研究科同窓会 宛



記念講演会について

2017年度文化勲章受章者斯波義信名誉教授（東洋史）および2017年度文化功労者東野治之名誉教授（日本史）の記念講演会を、2018年4月30日（月、振休）14時～17時に、大阪大学基礎工学国際棟（シグマホール）（豊中キャンパス）において開催いたします。